８月２５日

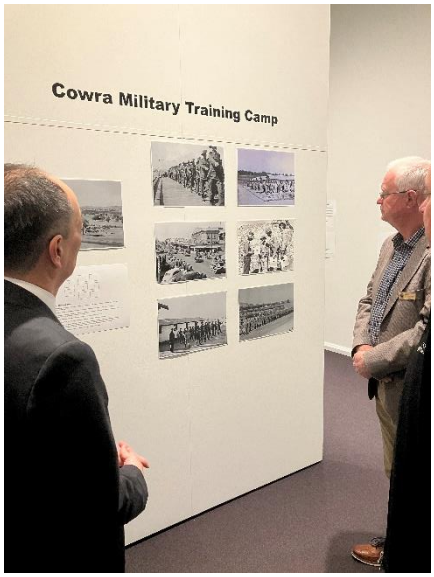
在シドニー総領事交流録　（第８回）
カウラ脱走事件８１周年行事への出席をとおして

この８月５日にカウラ脱走事件８１周年行事に出席しましたので、今回はカウラと日本の関係についてお話しします。カウラにあった捕虜収容所及び日本との関係については、前任者の「シドニー便り２．０」及び前々任者の「在シドニー総領事通信」で詳しく記されていますので、新たな気付きの点や自分の印象を中心にお話しますが、大まかな事実関係は次の通りです。

カウラは、シドニーからは西に約 310 キロにあり、第二次世界大戦中に捕虜収容所がおかれ、ここに収容されていた約 1100 人の日本人捕虜の一部が、1944 年 8 月 5 日未明に集団脱走（ブレイクアウト）し、日本人 234 名とオーストラリア兵 4 名が犠牲となった事件です。1964 年に設置された日本人戦争墓地では、毎年 8 月 5 日にカウラ市が主催して脱走事件の周年行事が行われ、本年の行事にはキャンベラから来られた鈴木量博大使とともに私も出席しました。

この周年行事の前日にカウラ入りした私は、ポール・スミス・カウラ市長及びローレンス・ライアン・元カウラ・グレイクアウト協会会長の案内で、街中にあるカウラ地域アートギャラリーで開催中の戦時中カウラ写真展を見学しました。展示写真を通じて、カウラには元々軍訓練場や武器工場があり、そして戦時中には、石油代替燃料としてのアルコール製造工場や連合軍に食糧を補給するための缶詰工場があったことが写し出されていました。そうした軍の訓練場の存在や鉄道が敷かれていたことが捕虜収容所の設置場所に選ばれた理由とのことです。もう少し掘り下げると、そもそも 1939 年に欧州で第二次世界大戦が勃発し、北アフリカ戦線で多くのイタリア兵捕虜を捉えた英軍が捕虜の収容場所を探す中で、広大な土地を有する豪州に捕虜の収容を依頼したことが契機になり、豪州が候補地選定をはじめ、候補地がカウラに絞り込まれたとのことです。このため、カウラの捕虜収容所に最初に来たのはイタリア兵捕虜で、日本人捕虜は 1943 年から収容されたとのことです。

この写真展で印象に残ったのは、収容されていた捕虜の写真で、イタリア人捕虜が楽しく皆で写っているのに対し、日本人捕虜は顔が写らないよう顔を背けていることでした。これは、こうした写真が国際赤十字経由で日本側に渡ることで、自分たちが捕虜になっていることが日本国内に分かってしまい、生きて虜囚の辱めを受けたとして、自らの不名誉だけでなく、家族も後ろ指を指されることを怖れたためです。イタリア人捕虜が収容所付近の農作業に手伝いに出て、周辺住民とも仲良くなった話を聞き、捕虜に対する考え方の違いが強く印象に残りました。



翌朝のカウラ退役軍人会が主催する81周年行事は、収容所跡地ではなく日豪戦争墓地にて執り行われました。こちらには、カウラ市長をはじめとするカウラ市関係者、鈴木駐豪大使等の我々日本側関係者に加えて、カウラ高校をはじめとする多くの学生も参加し、その中にはカウラ交換留学プログラムで来ている成蹊高校からの留学生も含まれていました。こうした参加者が、先ずは、脱走事件で犠牲となった4人の豪州軍人をはじめとする豪州関係者が埋葬されている豪州人墓地に、そして日本人墓地に献花しました。日本人墓地献花に際しては、カウラ青年カウンシルが世界平和を祈念する千羽鶴を献呈することから始まり、その後、多くの若人が献花するのを見て、カウラが戦後の日豪和解の象徴なだけではなく、こうした交流が次の世代に引き継がれていくことを確信しました。日本人墓地で、式典の最後にブリスベンの浄土宗阿弥陀寺から来られたJames Wilson Tetuyu主事が読経されるのを拝聴しながら、犠牲者の方々の御霊が安らかに眠られることを心より祈念しました。

式典参加者は、その後、カウラ日本庭園・文化センターに移動しました。この庭園は日本を代表する造園家であった中島健氏が設計された、海外では有数の本格的な回遊式庭園です。この庭園の一角でティー・セレモニーが行われました。最初は、素晴らしい日本庭園の中で茶道のデモンストレーションが行われるとばかり思っていたのですが（実際、5 月に開催された紅葉祭りの際には、同じ場所で裏千家の方々による本格的な茶道のデモンストレーションが行われました）、振舞われたのは紅茶とスコーンでした。これは、脱走事件後に、脱走捕虜の捜索が続く中、事件後 9 日目に憔悴しきった日本人捕虜 3 名がカウラの街中から外れた Weir 家族の家に辿り着いた際に、その家の奥様の May Weir さんが、焼きたてのスコーンと紅茶を出し、その捕虜達が食べている間に豪州官憲が駆け付け拘束されたとの話が背景にあります。もちろん官憲が来るまでの時間を稼いだ面はありますが、May さんは、官憲が来た際に、捕虜達がまだ食べ終えていないのを見て、食べ終わるのを待つよう官憲にお願いしたとのエピソードもあります。40 年後の 1984 年、その捕虜の一人がその場所を訪れ、May さんは既になくなっておられましたが、ご子息たちと思い出を語り合われています。多くの犠牲者が出た脱走劇の中での心温まる話として語り継がれており、その際に紅茶を運んだ水差しは今でも大切に展示されています。

この様に、カウラの方々が、脱走事件の犠牲者だけではなく、豪州国内の他の収容所で亡くなった日本人も含めて 500 余りのお墓を、長年に亘り綺麗な共同墓地として維持されています。また、毎年 8 月 5 日には、カウラの多くの若者も含めて、脱走事件を振り返っているのを見て、日豪和解に向けた戦後 80 年の地道な努力における、カウラの重要性を改めて感じました。奇しくも、この 8 月 5 日には、連邦政府から「もがみ」型護衛艦の選定発表が行われました。これは、カウラの多くの方々の善意とご尽力が、日豪和解に大きく貢献し手来たことは言うまでもなく、さらには、安全保障の中核的なところでも日本と協力していくほどに多くの豪州人から信頼を得ることにも大きく寄与したものであり、心より感謝申し上げたいと思います。また、カウラの日本庭園は、訪問する度に大変綺麗に維持されていることに驚かされますが、ビル・ウエスト前市長がカウラ日本庭園財団の理事長を務められていることもカウラ市が日本庭園をいかに重視しているかの証左と思いました。この日本庭園・文化センターでは、例年 9 月に桜祭りが開催され、茶道、生け花、合唱、着物、日本舞踊、弓道など日本文化を代表する各種催しも行われると伺いました。また、例年 5 月には紅葉祭りも開催され、私も出席し秋の素晴らしい日本庭園の眺めを楽しみました。カウラでは美味しい赤ワイン「さくら」も生産されており、スミス市長からご馳走になりました。こうした取組が、和解の歴史を背景に、次の世代を担う若い人々も積極的に交流に参加し、カウラと日本の繋がりの裾野が一層広がっていくことに私自身や当館も貢献していきたいと思います。皆様も機会がございましたら是非カウラの地に足を運んでみてください。

参考：

●鉄条網に掛かる毛布（Blankets on the wire）（Steven Bullard 著、田村恵子訳）
（英語・日本語）http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/WebI/Blankets/$file/Text.pdf

●A Town at War-stories from Cowra during WWII（Graham Apthorpe 著）（英語）